

トラック1プロローグ

*主人公(兄)から駅に着いたと連絡があり、走って駅へ

「おーい、兄さーん(遠くから呼びかけてる)」

「はあ、はあ、

ちよっと待って、深呼吸するから」

(深呼吸)

「うん、もう大丈夫」

「おかえり、もうしばらく会ってなかったけど、私のことは覚えてる？名前ちゃんと言える？」

「その顔、やっぱり・・・」

兄さんのことだからそんなことだろうとは思ってたけど…」

「雛子、昔毎日のように遊んでた雛子だよ」

「冗談って・・・あのさあ

全く、そんなんだからおばさんから縁談なんて紹介されるんだよ？」

「はあ、私の期待を返してほしいよううん、なんでもない」

「それにしても中々の大荷物だね、

たった2、3日泊まるだけなのにそんないる？

あっ！もしかしてこっちに帰ってくるのか!？」

「お土産？あー、そっか

あそこみんな顔見知りだもんね

そりゃあそんな量にもなるか（呆れ）」

「ほら、手に持ってる荷物貸して

そんな重たそうにしているとこっちまでしんどくなっちゃうよ」

「それに、ついたばかりで疲れてるでしょ？私も少しくらい持つよ」

「もうっ、子供扱いしてー（怒）

私だって来年には大学で立派な大人なんだから

このくらい大丈夫だよ」

「何？

あー、それもそうだね

ずっと駅で話してもあれだしそろそろ行こうか」

「あっ、少し遠回りしていい？

帰ってからだと叔母たちとずっと話ちやいそうだし、

今のうちに色々と聞いておこうと思って」

「ありがとう、じゃあ行こっか」

~~~~~

「おばさん心配してたよ？

東京に行ってから一度も帰ってこないし、連絡はたまにしかしてくれないって」

「どうして今年は帰ってこようと思ったの？そんなに忙しいの？  
今の仕事」

「あっそういうわけではないんだじゃあなんだろう」

「うん？いや、叔母さんからは何も聞かされてないよ

雛子が暴れるからダメだって言われて…そんなに大事な事情なの？」

「縁談!?お兄ちゃん結婚するの!?相手は私の知ってる人!？」

「ああうん、そうだよね

まだ決まったわけじゃないんだよねごめん取り乱したりして」

「あれっ、そうなの？

兄さんの浮いた話は全然耳にしないから応えると思ったよ

はあゝ（安堵のため息）」

「なんか安心したらお腹空いてきちゃった

兄さんはもうお昼食べた？」

「そっか、なら私が作るよ

去年あたりからずっと叔母さん練習してるから兄さんの口にも合うはず」

「メニューはまあ、夏だし冷やし中華あたりが無難そうかな」

「うっ、痛いところを・・・

たしかに麺の上に切った具をのせるだけだけど、

一応料理です！なにか不満でも!？」

「はい、兄さんもそれでいいよね？

兄さん？　って聞いてないし・・・」

「そんなあちこち見渡して、懐かしい？」

まあそっか、2・3年ぶりだし色々と見たくなるのはわかる  
でもなくんにも変わってないよ？」

「ふふっ、そうだね

たしかに空き地はかなり増えたね（楽しそう）」

「ここもだいぶ廃れてきたよ

私も兄さんみたいにそろそろ出た方がいいのかって

つい考えちゃう（苦笑）」

「うん？ああ、そうだね

もうすぐ家につくし、私は先に帰ってご飯の準備してくるよ」

「その間兄さんは縁談で何話すか考えといたら？」

それと、相手の方に失礼のないようにね！」

「それじゃお先に、またあとでー」